

「若者の結婚観・恋愛観の変容：『愛情』と『合理性』との狭間で」

千田 有紀

千田：それでは、よろしく申し上げます。私は「若者の結婚観・恋愛観の変容：『愛情』と『合理性』との狭間で」というタイトルで発表させていただこうと思います。



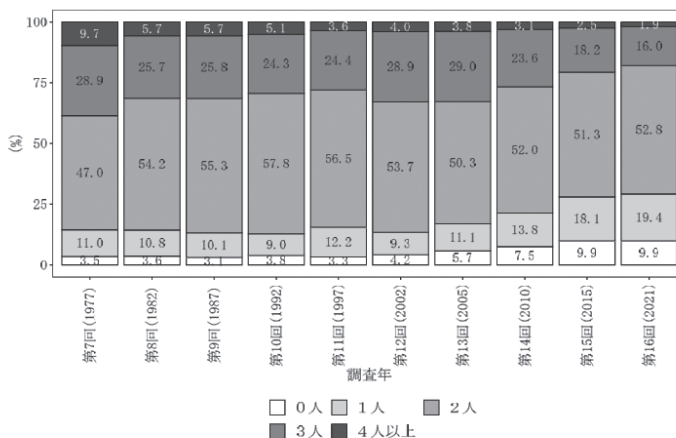
社会現象としての少子化論と書いてあるのですが、1.57 ショックがありましたね。今から思いますと合計特殊出生率が1.57 というのは結構高いではないかと思ってしまうぐらいなのですが、突然、少子化が問題になりまして何とかしなければならないということが社会問題として焦点化されました。1990年代は、もちろん未婚化も言われていたのですが、晩婚化論として基本的にはまだ楽観的なトーンが強かったように思います。結婚を控えているけれども何だかんだとっていつかは結婚するのではないかという楽観的な見通しがそこで行われていました。

これが2000年代になりますと未婚化論に変わっていきます。「本当に結婚しないんじゃないの？結婚しない若者がたくさん出てきているよね」というふうに変っていくのですね。小泉内閣が終わった後あたりから格差がすごく焦点化されていって、結婚したい若者が何で結婚できないのだろうか、結婚する意志があるにもかかわらず結婚を阻む何らかの要因が日本社会にあつてうまくいかなくなっているということで、何とかみんなを結婚させていかなければいけないという語りが出てきていたと思います。

例えば新聞記事などでは、すごく結婚したい若者がいて、その前にどんと壁があり、お金がないなどいろいろ書いてありまして、それを何とか越えてこの人たちを結婚させてあげなければいけないというイラストなどをよく見ました。

典型的な言説は、結婚の意思はあるにもかかわらずミスマッチがあつて相手に巡り合えないということです。先ほどもおっしゃっていましたが、行政などがさまざまに婚活を支援するのですが、本当にそれがうまくいったのかということを検証することが必要だと思えます。

図表 6-1-4 調査別にみた、妻 45～49 歳夫婦の出生子ども数の分布



注：対象は妻の調査時年齢45～49歳の初産どうしの夫婦。出生子ども数不詳を除く。
【報告書図表6-1-4 調査別にみた、妻45～49歳夫婦の出生子ども数の分布】

第 16 回（2021 年） 出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）

次に、出生動向基本調査についてのグラフですけれども、最新のものには相手とどうい
う出会いをしたかというところに「ネット」が入ったのです。3割ぐらいが「ネット」で
出会っていましたよね。昔は出会い系サイトという言葉をしまして、大体、出会い系
サイトといいますと次の検索ワードは「危険」「殺人」という感じで、そういうイメージ
があるのですけれども、それがマッチングアプリという名前に変わりました。女性雑誌な
どを見ても「マッチングアプリで初めて会う人にどういうファッションで行けばいいか」
という特集が組まれているなど、かなりカジュアル化しているのです。私もアメリカに暮
らしたことがあるのですが、アメリカは広いので本当にさまざまな収入や人種など、多様
な人がいる中でマッチングアプリを使ってパートナーを探すというのはかなりカジュアル
に、皆さんがしていて驚いた記憶があるのですけれども、だんだん日本も似てきているか
なと思います。

次に、結婚は経済的ハードルがあるということで経済の問題だというふうの問題化され
るわけですね。何でこういうふうの問題化されるかといいますと、本当に基本的に皆が結
婚したいということがすごく前提とされ過ぎていると私は思うのです。最近、留学生が
大学院などは多いのですが、留学生からしますと東アジアの中でも日本の女の子たちは変
だと彼らはくすくす笑いながら言うのです。「みんな結婚に憧れを持ってますよね。びっ
くりです」という形で、彼らからすると日本の女の子たちに結婚願望がまだあることがす
ごく驚きだという言葉をします。

特に私が見ていると思うのは、中国の留学生はシックスポケットで育ってきたわけす
ね。自分の親とその背後にいる祖父母、6つのポケットで一人っ子政策の中で息苦しいま
でに手をかけて育てられてきていまして、あまりそれを幸せだと思っていないといいま
すか、子育てはものすごくつらいという意識がありましてなぜそのようなことをしなければ
いけないのかという問題意識を持っている人がすごく多いというのが印象的でした。

第2子の出生意欲についてのインタビューで修士論文を書いた学生さんがいるのです
けれども、面白いのは、皆さんがものすごく合理的に考えていて、自分のキャリアと第2

子をはかりにかけるとキャリアのほうが重要だとはっきり言うのです。もう一つ面白いなと思ったのは、中国は平等意識がすごく高く、第1子と第2子に全く同じように教育的な投資をしてあげなければいけないということです。そう考えますと第2子のほうが少ないということは許されないので、一人っ子のほうがいいのです。平等が達成できないのだったら子どもを育てたくないといいますが、産むべきでないとおっしゃる人が多くて、それは私から見るとすごく面白い現象であったと言えるかなと思います。

こういう語り方で前提としているのはみんなに結婚の意思があるということともう一つは日本の低い婚外子出生率だと思います。つまり、未婚化しますと子どもが生まれないのは婚外子出生率が低い社会ですよ。

例えば、欧米並みに半分以上が婚外子で生まれるということがあれば、結婚するかしなにかということが少子化にダイレクトに結び付いてなくなると言えると思います。

ただ、これを見ていきますとみんな結婚すると子どもを2人産むといわれてきて、確かにまだその傾向は続いているのですけれども、下を見ますと子どもを持たない人たちは1割近くまでなっています。なおかつ子どもは1人でいいやという人が2割近くまでになっているということはすごく大きな変化なのではないかなと思っています。つまり、確かに二人っ子規範はまだあるのですけれども、結婚さえすれば子どもが生まれるという話から、結婚した夫婦からも子どもが減りつつあるということですね。

1999年は、ある種、特権層としてのパラサイト・シングルと書いてありますけれども、これは本当にはやった山田昌弘先生の言説で、親元にいるから結婚しないということです。ですから、独身税を課せというようなことを言っていたのですが、この時はまだそれこそ昔にあった独身貴族という見方で結婚しないことはそれほど悲惨ではなく、むしろ甘えている人たちが結婚しないというような語られ方をしてきたということです。

2000年代に入りますと30歳以上で結婚していない人は負け犬といういわれ方をしましたが、今から思いますと30歳未婚は割と普通ですので30歳というところは変わってきたのかなと思いますけれども、結婚することが勝ち負けであるという意識が出てきているわけですね。要するに結婚しない人がいるということが指摘されてきたということですね。(酒井順子、2003)

その後、『子の無い人生』を10年以上後に書いているのですが、結婚よりも子どもがいるかないかということのほうが実は大きなメルクマールなのではないかと書かれているわけですね。

2024年、今年の流行語大賞が「ふてほど」で、みんな「ふてほどって何？」という感じで、私もドラマを見ていたのですけれども、何だったっけと思い出せないほど流行語自体ができにくくなってきていると思いますね。いろいろな流行語大賞やモデルプレスさんが発表した流行語などを見ていまして、私は「無課金おじさん」と「タイミーさん」と「猫ミーム」だけ分かりまして、あとはほとんど分からなくて、学生に「これって何のは何？」と聞きますと「それは、何とかっていう番組があっって言ってるんですよ」と。

「ほん money」などは「何？」と言いましたら「みんな『本当に?』っていうのを『ほん money』って言うんですよ」などといろいろ教えてもらったりしました。

希望格差社会→結婚もできない「負け組」の存在

- ・ 希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く
- ・ 2004年 「結婚できない」「負け組」「犠牲者」
- ・ 現在の日本は職業、家庭、教育のすべてが不安定になり2極化し、「勝ち組」「負け組」の格差が拡大している。「努力は報われない」と感じた人々からは希望が消滅し、日本は将来に希望が持てる人と絶望する人に分裂する「希望格差社会」に突入しつつある。



世代を超えた共通経験や共通言語が本当になくなってきていると思ったのですが、『希望格差社会』の「格差社会」はユーキャン流行語大賞を受賞しまして、結婚できないのは負け組であり犠牲者なのだと。つまり、今まではいろいろと進学して就職して結婚するというライフコースがパイプのようにつながってきていたのに所々漏れていて、それがうまくつながらなくなってきているということですね。ある種の社会の機能不全と、なおかつ結婚できないのは社会制度に負けてしまっている犠牲者なのだという語られ方をしています、これは、みんな結婚することが良い、みんな結婚したいと思っているのだ、結婚が善なのだという意識を前提としていると思うのですね。

2007年には『おひとりさまの老後』という上野千鶴子さんの本が出まして、私からしますと普通のエッセーかなと思ったのですが、私の周囲の年配の女性がものすごく感動したと言ひまして、買ってみんなに配ったりしている人もいまして少しびっくりしました。1人でもいいのだというのは昭和的なライフスタイルを生きてきた人たちからしますと言われたこともなかったことです。

「たまたま夫が死んで1人になったけど、でも1人でもいいんだね」ということでそのことにすごく驚きを感じるおひとりさまという時代がありました。

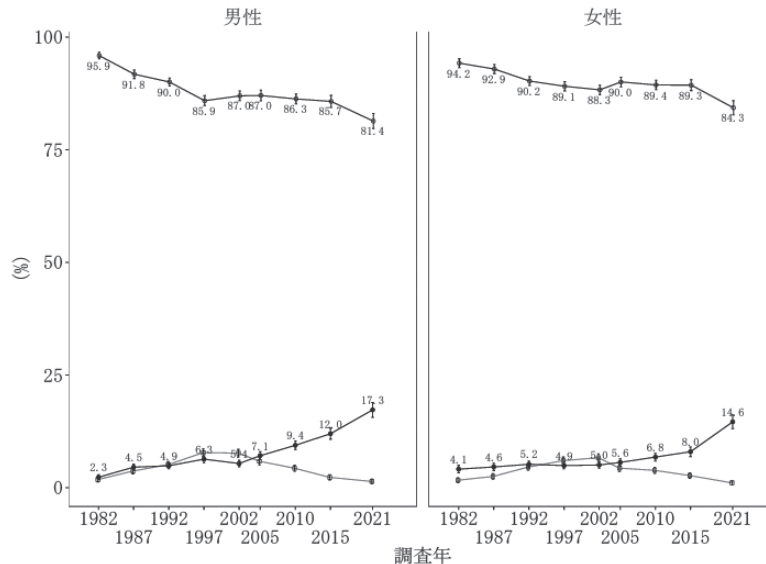
2008年になりますと婚活時代ということで、ある種、就職活動のように活動しないと、結婚はば一っとしていてもできるものではないという時代が来たといわれるわけです。

生涯未婚率、男性 23% 女性 14% 過去最高 朝日新聞 2016年4月5日

- 生涯未婚率は上昇傾向が続く…
- 50歳まで一度も結婚したことがない人が2015年に男性で4人に1人、女性で7人に1人いたことが、国立社会保障・人口問題研究所の調査で分かった。こうした人の割合を示す「生涯未婚率」は、10年の前回調査から男女とも3ポイント以上増えて過去最高を更新した。
- 同研究所が昨年9月に公表した出生動向基本調査によると、「いずれは結婚したい」と考える18～34歳の未婚者の割合は男性85・7%、女性89・3%だった。高水準だが、「結婚資金」や「結婚のための住居」の確保が障害と考えている人が多く、研究所の担当者は「非正規労働者の増加も生涯未婚率の上昇に影響している」とみている。(井上充昌)

例えば、2016年の朝日新聞の記事なのですが、いずれは結婚したいと考えている人は高水準だが、結婚資金や結婚のための住居の確保が障害と考えている人が多く、国立社会保障人口研究問題所は、非正規労働者の増加は生涯未婚率の上昇に影響しているというのですね。

図表 1-1-1 調査別に見た、未婚者の生涯の結婚意思



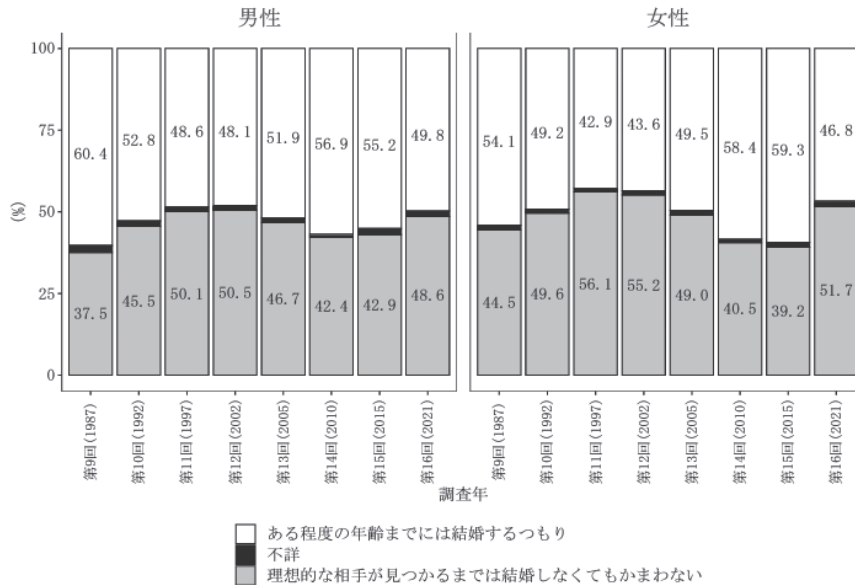
○ いずれ結婚するつもり ● 一生結婚するつもりはない ○ 不詳

注：対象は18～34歳の未婚者。図中のマーカー上のエラーバーは95%信頼区間を示している。客体数は、第8回(1982)男性(2,732)、女性(2,110)、第9回(1987)男性(3,299)、女性(2,605)、第10回(1992)男性(4,215)、女性(3,647)、第11回(1997)男性(3,982)、女性(3,612)、第12回(2002)男性(3,897)、女性(3,494)、第13回(2005)男性(3,139)、女性(3,064)、第14回(2010)男性(3,667)、女性(3,406)、第15回(2015)男性(2,705)、女性(2,570)、第16回(2021)男性(2,033)、女性(2,053)。設問「自分の一生を通じて考えた場合、あなたの結婚に対するお考えは、次のうちどちらですか。」(1. いずれ結婚するつもり、2. 一生結婚するつもりはない)。

【報告書図表1-1-1 調査別に見た、未婚者の生涯の結婚意思】

結婚したいのに結婚できない人がたくさんいるという問題があったのですが、最近のこれを見てみますと、これも永井先生が出してくれたグラフと同じですが、明らかに一生結婚するつもりはないという人が増えているという問題に取り組まないといけないのではないかなと思います。これもある程度の年齢までには結婚するつもりという人が必ずしも高くなく、減ってきています。

図表 1-1-3 調査別にみた、結婚意思をもつ未婚者の結婚に対する考え方
(年齢が理想的な相手か)



注：対象は「いずれ結婚するつもり」と回答した18～34歳の未婚者。客体数は、第9回男性(3,027)、女性(2,420)、第10回男性(3,795)、女性(3,291)、第11回男性(3,420)、女性(3,218)、第12回男性(3,389)、女性(3,085)、第13回男性(2,732)、女性(2,759)、第14回男性(3,164)、女性(3,044)、第15回男性(2,319)、女性(2,296)、第16回男性(1,654)、女性(1,731)。設問「同じく自分の一生を通じて考えた場合、あなたの結婚に対するお考えは、次のうちどちらですか。」(1. ある程度の年齢までには結婚するつもり、2. 理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない)。
【報告書図表1-1-3 調査別にみた、結婚意思をもつ未婚者の結婚に対する考え方(年齢が理想的な相手か)】

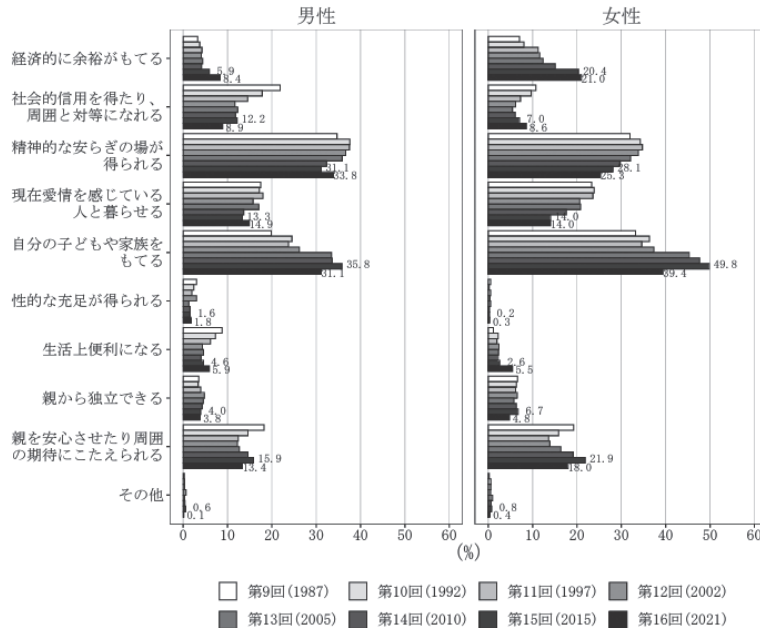
これは面白いと思ったのですが、結婚のメリットが自分の子どもや家族を持てるということになっていますね。子どもや家族を持てるという不思議なワーディングですが、基本的には子どもが欲しいから結婚するということだと思うのです。しかし、急激にそのことがメリットとして意識されなくなってきていて、いずれ結婚するつもりがあったことがある女性が若い世代でぐんと減っていることが分かります。

これは落合恵美子さんの言い方ですが、1990年代後半から日本ではなし崩し的に性革命が起こりまして、ロマンティックラブ・イデオロギーの愛と性と結婚、愛する人と結ばれて子どもをつくるというものがぐずぐずになってきて、愛があれば性交渉があってもいいし、それが必ずしも結婚に結び付かなくてもいいという傾向が出てきていました。その当時から結婚に至る道のすごく大きなものとしてできちゃった結婚が挙げられ

まして、子どもができてしまったら結婚するというので、一応、生殖は結婚と結び付いているのですけれども、それもぐずぐずになりつつあるかなと私は最近思っています。

その頃、よく学生が彼氏が避妊をしないという話をしまして、私からしますと「避妊しないなんて、あなた、愛されていない。大事にされていないんじゃないの?」と思いましたが彼女は「私は大事にされている」と言うのですよ。「何で?」と言いますと「避妊しないっていうことは子どもができたら結婚してもいいって考えてるってことですよ」という形で、ある種のきっかけとして子どもができるということは大きいと思っている人たちがいたということですね。

図表 1-2-1 調査別にみた、各「結婚の利点」を選択した未婚者の割合



注：対象は18～34歳の未婚者。何%の人が各項目を主要な結婚の利点（2つまで選択）として考えているかを示す。結婚することに利点があると回答した割合は、第9回（男性69.1%、女性70.8%）、第10回（同66.7%、71.4%）、第11回（64.6%、69.9%）、第12回（62.3%、69.4%）、第13回（65.7%、74.0%）、第14回（62.4%、75.1%）、第15回（64.3%、77.8%）、第16回（63.3%、70.9%）。設問「今のあなたにとって、結婚することにはなにか利点があると思いますか。左下のワクのあてはまる番号に○をつけてください。『1. 利点があると思う』に○をつけた方は、右側のワクの中から具体的な利点を2つまで選んで右の回答欄に番号を記入してください。」

【報告書図表1-2-1 調査別にみた、各「結婚の利点」を選択した未婚者の割合】

新しい傾向をまとめますと、結婚しなくてもよいと思う人が1～2割います。理想の相手がいなくても、結婚しなくてもよいという層が増加しています。結婚すれば自分の家族や子どもが持てることを利点だと考える層が減少しています。若い女性のいずれ結婚するつもりがあると思った経験が激減しています。

新しい傾向

男性17.3%、女性14.6%のひとが結婚しなくてもよいと思っている。

「理想の相手がいなければ結婚しなくてもよい」層が増加傾向に転じる。

結婚すれば、「自分の家族や子どもをもてる」ことを利点だと考える層が減少している。

若い女性の「いずれ結婚するつもりがある」と思った経験が激減（4割弱）。

そういうところで、大学生の恋愛と友情に関する意識調査を3年間やりまして、今回、発表させていただくのは初年度のものなのですが、ここら辺は本質ではないのですが、例えば浮気の境界は何かと聞きますと若い人たちは手をつなぐと浮気だと言うのですね。「何でだろう。意外だな」と思ったのですが、内心は分からないけれども、手をつなぐというのは見えることだから、可視化されたもの、手をつないだ時点で浮気だと言うのですよね。

でも、性的な交渉をしても「本当に酔っ払っていたらしようがないですよ」「酔っ払っていたらあるよね」とお酒で免責するということがありまして、手をつないでも浮気なのですが、何があっても酔っ払っていたのなら仕方がないという免責がされるということで、私からしますとどういう価値観なのだろうと思ったりするのですけれども、そういったところが共通しています。

セックスフレンドについて聞きますとセフレは何でも話せる信頼できる人だと言うのですね。例えば「風俗で働きたいとかそんな話は親にも彼氏にもできないけど、セフレにだったらできる。だから、セフレは何でも話せる相手なんですよ」と言ったり、「セフレのメリットは？」と言いましたら「恋人関係だと男はお金使わなきゃいけない。週何回会わなきゃいけない。予定組めなくなっちゃう。自分のことできなくなっちゃう。でもね、セフレだったら『今日、会える？』って言ったら『うん。会おう』みたいな感じでそこら辺の居酒屋でご飯食べてもいいので気楽なんだよね」と考えたりしているわけですね。

恋愛は契約だと言っていますけれども、セフレと恋人は重みが違うと言うのですけれども、付き合っている時はその人と過ごして一緒にいなければいけなかったり、友達と遊んだりしたいけれども、その関係のために友達関係を犠牲にしたりしなければいけないと。ですから、付き合うというのは契約であって縛りがないと付き合っていないと思っているのです。

あと、すごく多いのは恋人には遠慮をするということですね。恋人にはメリットとデメリットがありまして「安心感がある」「不可欠な存在になる」というふうになっています

けれども、セフレには何でも言えると。「デメリットは？」と聞きますと「恋人には遠慮しちゃう。思ったことが言えない」と。この人はセフレは信頼できないと言っても、先ほどの人とは逆ですけど、「いること自体がデメリット」「自分の価値を下げってしまう」ということです。

これもすごくありまして、セフレのデメリットは何かと聞きますと、この関係が人にばれた時に自分のサークル内や友人関係での地位が危うくなると言うのですね。これはどうも学校によって違うようで、私が聞いたところによりますと偏差値が高めのイケイケの大学ですと「俺、セフレ5人いるけど」と言っても全然平気だという空間があるところもあるようなのですが、うちの大学はこぢんまりとして人間関係が密ですので、セフレを持っていますと「何々ちゃんと付き合っているくせにセフレがいるなんてひどい」という感じで信頼を失ってしまう可能性があるということですね。

恋人は周囲に承認されることだということですね。要するに付き合っても付き合っていないくせに中身は変わらないと思っているわけですね。付き合うとマイナスの面ばかりが出てくるということで「何がマイナスなの？」と言いますと「付き合っていることを彼女が言いたがる」「写真をインスタとかに上げちゃう」ということで「私たちの関係を承認して、承認して。私たちカップルなのよ」ということをされるのがうざいと言っているのですね。こういう形でセフレは「ごちゃごちゃ言わないし、楽だ」と言っていますね。

こう見ていると、本当は好きなだけけれどもセフレに甘んじている人ももちろんいる一方で、彼氏や彼女はないのだけれどもセフレの関係にとどまっている人もいるのですね。話を聞いていきますと恋人関係は面倒くさくてみんなに会わずにいつ付き合っていたのかということやいつ別れたのかということがばれないような気軽な関係があればいいというふうになっています。これはロマンティックラブ・イデオロギーがすごく強くて、性規範が強かったらそういう付き合いは結婚に行かなければいけないというふうになるのですけれども、そうでなくなりましたら面倒くさいという言い方がすごく多いのですよね。

セフレのメリットというのがあります。繰り返しになりますけれども、女子でも「割り切れた関係で何でも言える。恋人には遠慮しがちで、思ったことが言づらい。恋人関係は多少なりとも相手に合わせなきゃいけない。セフレにしかできない話もあるし、信頼関係があると思う」。これは、先ほど言いました身の破滅だと思っている人が多いのですけれども、だからこそお互いに口を堅くしてセフレという関係を続けているということはすごく信頼できるパートナーだというロジックになっているのですね。

「向こうがその関係として割り切っていれば楽だけど、気があってあわよくばって考える子だと面倒くさい。メリットは、いつでも会えるし、楽で気を使わなくて済む。ごちゃごちゃ言わないってことが大事」。これは「セフレは相手の体しか求めていないからいざこざが起こらない。それがメリットっていうわけですよ」とも言っています。「恋人にはあるけど、セフレに気持ちはない。恋人のデメリットの部分を気にしなくて済むのがセフレだ。精神的な負担が少ない。重みが違うよね」という言い方をしていますね。

あと、「お互いそういう関係だっていうふうに認識していれば楽で気楽ですよ。恋人には言えないとか求められない部分を補っている」。同じだと言う人もいますね。「彼氏・彼女っていう名目があっても意味がないよね。中身があればいいんですよ」。このNさ

んは気軽な人とは少し違って好きだったから体の関係を持ってしまったというタイプの人ですね。「彼氏にセフレがいてもいい。精神的に好きになってなければいいんだよ」という感じで恋人だけではなくてセフレが精神的・肉体的安定剤だという女子がいます。

男子は、「恋人だと大切にしなければいけないから面倒くさい。だから、セフレは楽でいい。下手な彼女よりも話せる。恋愛関係だと、別れた後、気まずい」ということで、周囲とのフォーマルな周囲から承認される恋愛関係がすごく面倒くさいと言います。セフレのデメリットとしましては「周りの人の目が気になる」「好きな人がいるんだっただけでつらいほうがいい」「自分の価値が下がる」「そういうセフレがいたという経験が残るのが嫌だ」という形でセフレがいるような男の人とは付き合い切れないということを女子は言いまして、男子は「仲のいい友達だったのにセフレになっちゃうと疎遠になっちゃうから嫌なんだ」もしくは「多くの人に理解を得られないからどうかな」ということを挙げています。

それに対しまして恋人がいるといいことというのは、よく分からないのですけれども、「季節を感じられる」「つらい時に話し相手になる」「羨望（せんぼう）のまなざしで見られる」ということです。これはすごく今の若い子たちによくあることだと思うのですけれども、彼が自分と一緒に画像を Instagram に載せるか載せないかということはかなり大きなハードルになっているのです。要するに、自分と真面目に付き合う気があると Instagram に載せてくれたり、もしくは、自分が見て恥ずかしくないルックスだったらインスタに載せてくれたりするのではないかとこのころで、フォーマルの恋愛関係は仲間の間での承認がものすごく関係しているということがありますね。

「寂しくなったら会える」「愛がある」「何でも言える」「簡単に関係が切れない」「気を使わなくても済む」「どこどこ行きましたみたいな、それでインスタでいいねがもらえる」などということで、当然、恋人のほうがきちんとしたことが言える、気を使わなくて済むと思う人も人によってはありますけれども、セフレなどのほうが気を使わなくて済むからすごく楽だと考えている人もものすごく多いことが分かります。

デメリットとしてすごく意外だったのですけれども、多くの人が「彼女の誕生日に何もしないわけにはいかない。お金がかかる」ということで金銭的な負担について言及していました。あと、「自由が利かない」「気を使う」「何回会わなきゃいけないと制約ができてしまって予定が組めない」「恋人以外の人と性的な関係になれない」「信頼関係があればあるほど浮気されていた時のダメージが大きい」「束縛される」「友達と遊べなくなってしまう」ということで大体同じようなことを挙げています。

私たちはセックスフレンドというときよっとして「何でセックスしているのに友達なのですか」と思うのですけれども、若者は友達以上恋人未満のような割と曖昧な関係を持つことにためらいはそれほどなくて、恋人よりも気軽なセフレはむしろ友達、フレンドというほうに重点があることがよく分かります。

気楽な関係ではあるのですけれども、それでいて信頼関係がありまして周りにばれた時にリスクがあるからこそ、セフレは信頼関係のある人としか言えないと思うのです。それに対しまして恋人関係の面倒くささですね。要するにこれは結婚と一緒にだと思のですが、恋人関係は周囲を巻き込んで承認されている関係だからうとうというしいいうことで

す。「2人だけの関係じゃなくなっているので面倒くさい」「言いたいことが言えない関係、気を使わなきゃいけない関係なんだ」「記念日など配慮しなければいけないものがたくさんあるから面倒くさい。お金がかかる。金銭的負担がある」。

気持ちが安定するという事は反対にどういうことかといいますと、安定してそこに精神的に依存していると今度は浮気した時のダメージが大きいと考えているというような形ですね。ですので、今の若者は、性的な関係がカジュアル化して必ずしも結婚に結び付かなくてもよく、逆に言うと、愛とも結び付かなくてもよくなっていて、ロマンティックラブ・イデオロギーのようなものが揺らいでいるが故に恋人関係にならなくても性的な関係ができ、それ故に恋人関係を比較した時に面倒くさいと感じる人が増えているのではないかなと感じています。

私からは以上です。ありがとうございました。